

伝上杉謙信所用金銀襷緞子等縫合胴服について 下

——伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類調査報告 一——

神 谷 栄 子

五 寄せ裂仕立に関する考察

1 寄せ裂仕立について

裂を接ぎ合わせて衣類^{註13}を作ることは相当古くから行われていたと思われる。現代のように機械生産で多量の裂が産出されている時代でも、美しい裂や珍しい裂の接ぎ合わせ使用は勿論、見本裂や端裂を接ぎ合わせて用いることも屢々であり、僻地、貧困等の理由で繊維品が容易に入手できない場合は、必要上寄せ裂やぼろ裂^{註14}集めで衣類を作るのが常である。ましてすべてを手工によらねばならなかった時代は、生産量は僅少で裂に対する節約や愛着は現代の比ではないから、残り裂や端裂でも貴重な筈であって、そこには当然接ぎ合わせの方法で使用の目的を果したことが考えられるのである。

寄せ裂仕立の場合にも一種類の裂で仕立てる場合と同様、作成に当たりの動機が二つある。即ちその動機になった目的が着用する「衣類」にあるか、使用する「裂」にあるかのどちらかであり、この場合は一種類

の裂で仕立てる場合にくらべて後者の割合が多いのが注目される。それは、余り裂や端裂に対する愛着や節約から「裂」を集め接ぎ合わせて衣類を作ることが、後者の「裂」に作成の動機が置かれることと一致するからで、寄せ裂仕立に小裂利用の性格がある以上当然である。

更に寄せ裂仕立の「裂」が動機になる場合には、裂に対する愛着や節約以外に信仰的な性格や俗信が殊のほか強く、^{註15}またこの種の寄せ裂にはその衣類に小袖や袴の類が殆どないのが特色である。^{註16}

ところで作る動機が「衣類」にある寄せ裂仕立は、本来ならば一種類の裂で仕立てるところを、裂が足りないため、二種類以上の裂を接ぎ合わせて作る場合が殆んどであるから、それらには共通して接ぎ合わせる裂はなるべく大きなものを、裂の種類はなるべく少くといった考慮が見られ、更に衣類本来の目的である使用面の逼迫性が濃厚で、「裂」が作成動機になる場合とは種々な点で対照的である。

しかしこれらは何れにしても端裂や残り裂小裂等使用のささやかな仕立であって、真新しい一続きの大きな裂を裁断し縫合わせる仕立とは根

本的に異なる。

意匠上の発展は特に独自性が著しい。

2 寄せ裂意匠の発展、並びにこの胸服の意匠成立の背景

このようになつましきの上に立った寄せ裂仕立にも、それにふさわしい発展があつて今日に至っている。中でも

かつて糞掃衣ふんそうい（一例、挿図13）は粗服に徹する僧衣本来の面目を示すものであった。それが正倉院の刺衲袈裟に見られるような、裝飾的效果を求めたものになり、やがては後世の美しく模様化された遠山袈裟（一例、挿図14）にまで進められた。

修行精神から発した粗服が眼目の僧衣でさえ、このような寄せ裂仕立独得の意匠の発展があつたのであるから、ましてささやかな中にも喜びを見出したいのが本能である一般庶民の間にこの発展がない筈はない。

小袖の段の起源を思わせる対馬のハギトウジン註18、鎌倉から室町にかけての片身替りの直垂註19、室町から江戸初頭に多い片身替り、袖替り、段の小袖等、現存遺品資料並びに絵画資料から考察すると、庶民間での、一枚の衣服を作るのに幾種類もの裂を寄せ集めて仕立てなければならなかつた乏しい衣生活がその根底にありながら、接ぎ合わせを行う立場に常時寄せ裂の裝飾性を求めていたのが窺われる。そしてその裝飾性は、明らかに計画的に意匠を作成したと認められる種類の片身替り、袖替り、段にまで進んだのであった。

即ち鎌倉時代の祭礼装束の直垂（一例、挿図15）等は、派手な効果が目的の寄せ裂仕立であることは明瞭であり、更に室町から江戸初頭にかけての初期小袖の片身替りや段に、それが別裂仕立ではなく意匠企画が既に織や染の段階で行われている凝ったものに屢々直面するのなどは、本来の接ぎ合わせからは脱して、その意匠だけが完全に独立した姿といえる。これは、当時の武士階級の間にも、庶民の接ぎ合わせ意匠の觀念が浸透していたことを意味すると同時に、その意匠がまだ模様染の発達して

挿図13 糞掃衣部分 法隆寺献納宝物

挿図14 遠山袈裟部分 江戸中期 滋賀県 石山寺藏

挿図15 片身替りの直垂
春日権現靈験記第十三巻模本

いなかった当時、一枚着としての小袖を飾るにふさわしい効果的なものにまで発達していったことを物語っている。

この片身替り、袖替り、段は、室町・桃山の染織工芸が、平安・鎌倉の織の時

代から江戸の染の時代へ移る過渡期^{註20}にあつて、種々な過渡的様相を呈する中で、前時代的傾向が濃く、従来の織の技術、当時多量に舶載された外来裂の利用、寄せ裂仕立及び寄せ裂意匠等が相俟つて、新たに服装の主流となった小袖の一意匠として独得の進展を見せたのである。

さて、この寄せ裂の胸服は室町末若しくは桃山初頭の製作である。既にその意匠が片身替り、段と同類であることは述べた。こうすすめてくるとこの胸服が如何なる寄せ裂であるか歴然とするであろう。この高度に凝った贅沢な胸服は、この時代、前述したように進んでいた片身替り、段等の意匠の中にあつて、それらの構成に手馴れた優れた意匠感覚の持ち主があれば、それらの応用形として当然こういう試みも行つたと思われる。この傑作は決して突如として出現したのではない。ところでこの胸服の殊更に細かい寄せ裂には意匠以外の目的、即ち1において述べたような、信仰的乃至は俗信的な目的も考えられるが、それは現段階では考察が困難であるので言及を控えたい。

寄せ裂に一貫している意匠上の特質は、異つた裂の色や質、形、模様、

裂の大きさ等の対比対照の面白さであるが、江戸時代も中期近く、帯の幅が広くなつてくると、そこにもその面白さが使われるようになり、渡りものである唐棧の余り裂を巧みに接ぎ合わせた羽織や胸着は、気のきいた品のよい江戸趣味の洒落着であつた。江戸の後期、型染の技術が発達した頃、遂にこれは寄せ裂模様（一例、挿図16）となつて屢々染模様として扱われ今日に及んでいる。

このように寄せ裂にはそこに寄せ裂独自の美しさ面白さがあるため、

京都・千総蔵

それが或時は
つましい衣生
活の唯一の喜
びとなり、或
時は寄せ裂自
体の面白さか
ら試みられ、
更に意匠自体
に発展が生じ
ている。これ
は手先の器用
な日本人の、
如何なる裂で
も巧みに接ぎ
合はす優れた
技術と、その

挿図16 型友禪の寄せ裂模様例（右明治19年製 左同28年製）

ための労をいとわな性格、更に歴史的にみて節約を余儀なくされた時代が多かったといった条件から発展したものと考えられる。要するに寄せ裂や寄せ裂模様の発達は、つましい衣生活と手先の器用さに源を發した所産である。

3 この胸服における寄せ裂の特異性

この胸服に十六種類の表裂が使われていることは既に幾度か触れたところである。その中の一つ萌黄地笹蔓花文様緞子（笹蔓手、裂の種類別番号16）は薄縹色笹蔓花文様緞子（笹蔓手、裂の種類別番号3）と同文の色違い（第二一六号図版I、Va、挿図12参照）で、その使用は挿図12の裂の通し番号65の小片（4×4.5cm）一ヶ所だけであり、それは如何にも珍しく美しい裂を寄せ集めて接ぎ合わせる寄せ裂の気分がよく現れているところで、そういう点からみても、これは勿論「美しい裂が種々あるからこれを接ぎ合わせて何か作ろう」という寄せ裂の意図から出たものであることは間違いないであろう。では一体何処が普通一般の寄せ裂と異なるのであろうか。

ここに用いられている表裂は先に挙げた一種類を除き、何れも始めは相当な大きさがあつたと想像されるが、それをこの意匠に合わせて思い切りよく切りこまざいて使った点驚異である。この大きな貴重な裂を切りこまざいていくことは、普通では真似のできない芸当^{註21}で、このように臆することなく高級な舶来品を切りこまざむ英断は、よほどの無謀かよほどの自信と勇気がなければ出来ることではない。この場合、意匠の出来を見ればわかるように、自信と勇気の所産であることは明らかであろう。

また「小さな裂もあますことなく用いて」という普通の場合の寄せ裂製作の考えでは、この見事な意匠は望めない。何故なら、三角や四角その他の多角形を大小とりませ、しかも十六種類の裂をほどよく配置することは、それが複雑な難しい事柄を幾重にも持っているだけ、最初に行う意匠企画は、よほど充分な用布が準備されない限り不可能だからである。

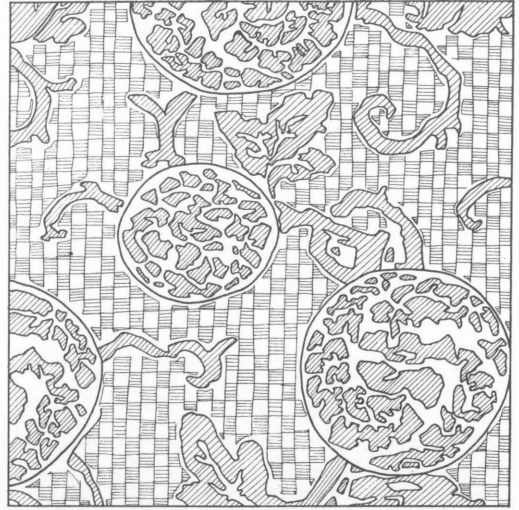
そのようなことからこの寄せ裂は残り裂、端裂とはいいい条、十六種類の高級な裂が充分に用意され、惜し気もなく切りこまざかれて作られたという、実質的にも気分的にも極めて贅沢な点が異色であろう。

では次にここに用いられている裂の説明に移りたい。

既に三において、ここに用いられている十六種類の裂が名物裂級の裂であることを述べた。その「名物裂級」という意味は、当時即ち十五・六世紀ごろ、主として中国の明から相当多量の裂が入ってきていた中で三百種から三百五十種類がいわゆる名物裂^{註22}として、当時の程度の高い文化人である武人や茶人の好みによって選択されていた。その選択は別に何かの基準があつたわけではなく、あくまでそれらの人達の好みによつたので、高級品が必ずしもその選に入るといふことはなかったが、しかしさすがに好みのおい目の高い人達の選だけあつて、選ばれたものには下級品は見当らない。即ち「名物裂級の裂」というのは名物裂の選に入る程度の高級な外来裂のことである。ではそれらの表裂について詳述しよう。

(イ) 十六種類の裂の種類、その品質

十六種類中、金襴三種（中二種同文）、銀襴二種、緞子九種（中二種同文）、縹



挿図17 茶地石畳に藤巴文様金襴文様図

子一種、綸子一種である。個々の裂の説明はこの織別順序で行う。

茶地石畳に藤巴文様金襴（裂の種類別番号6）

石畳文様は名物裂に屢々見られ、この金襴のように小さい石畳が地文になって上文が散らしてあるのでは名品

の「伊予簾緞子」（石畳の大きさ〇・三センチ前後）、この金襴に文様が多少似ているものでは「薄紅地鳥の丸に宝尽し文様金入緞子」（鳥の丸の直径五・二センチ、石畳の大きさ〇・三センチ前後）がある。

（文様及びその大きさ）

挿図17 藤巴の大きさは大の直径約、五・五センチ、小の直径約四・三センチで、中には四・四センチぐらいのものもある。石畳の大きさは〇・三五センチぐらいのものと〇・五センチぐらいのまで種々ある。

（地合）

他は経の五枚縞子、文は平金糸で織りあらわされており、金糸は緯糸二本おきに入っている。地揃みで経糸一〇本目毎に一本が揃んでいる。経糸は一センチ間に一二〇本前後、緯糸は一センチ間に二四本前後、金糸は一センチ間に一二本前後入っており金糸の幅は平均〇・五ミリ。

（糸の色、撚等）

糸は経も緯も同じ茶色であるが経は細く緯が太い。経糸はZ撚、緯糸の撚は不明。

白地石畳に藤巴文様金襴（裂の種類別番号12、第二一六号図版Ⅲa）

伝上杉謙信所用金銀襴緞子等縫合胴服について 下

これは前述のと同文であるが、この方が地質が詰んでいる。

（文様の大きさ）

藤巴の大きさは大の直径約五・二センチ、小の直径四センチ（多少小さいのがある）。石畳の大きさは〇・四センチ平均（茶色の場合と同様〇・三五センチぐらいのから〇・五センチぐらいのまで種々ある）。

（地合）

地は経の五枚縞子、文は平金糸で織りあらわされており、その金糸は緯糸二本おきに入る。地揃みで経糸一〇本目毎に一本が揃んでいる。経糸は一センチ間に一二〇本前後、緯糸は一センチ間に三〇本前後、金糸は一センチ間に一五本前後入り、金糸の幅は平均約〇・五ミリ。

（糸の撚）

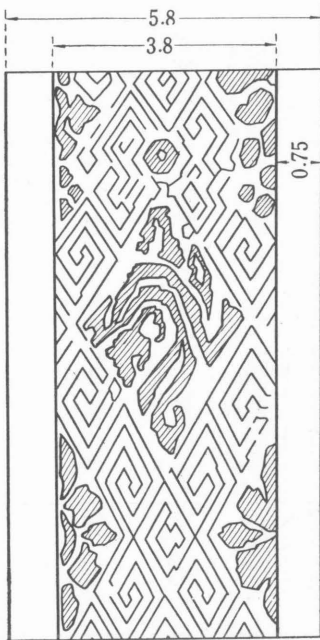
経糸はZ撚、緯糸の撚は不明。

花色雷文菱襷竜に花形文様縦縞金襴（裂の種類別番号7）

菱や入子菱、雷文菱が襷になって繫って地文になり、そこに上文が散らしてある金襴は名物裂によくあり、これは文様、地質共にその一連のものと思われ。また同じく上杉の緋羅紗陣羽織の裏に浅葱色の緞子でこれに似た模様のが使っている。

（文様及びその大きさ）

挿図18



挿図18 花色雷文菱襷竜に花形文様縦縞金襴文様図

（地合）

地は経の五枚縞子文は平金糸で織りあらわされており、その金糸は緯糸二本おきに金糸が一本入っているのは

前記二種と同様。地搦みで、経糸一〇本目毎に一本が搦んでいるのも前記二種と同様。経糸は一センチ間に一二〇本前後、緯糸は一センチ間に二六本前後、金糸は一センチ間に一三本前後入っており、金糸の幅は平均約〇・五ミリ。
 (糸の色、撚等)
 経糸は濃い花色で撚はZ撚、緯糸は浅葱に近い花色で撚は不明。この金糸は赤味がかった金である。

薄青緑色雷文に花の段文様銀欄 (裂の種類別番号10)

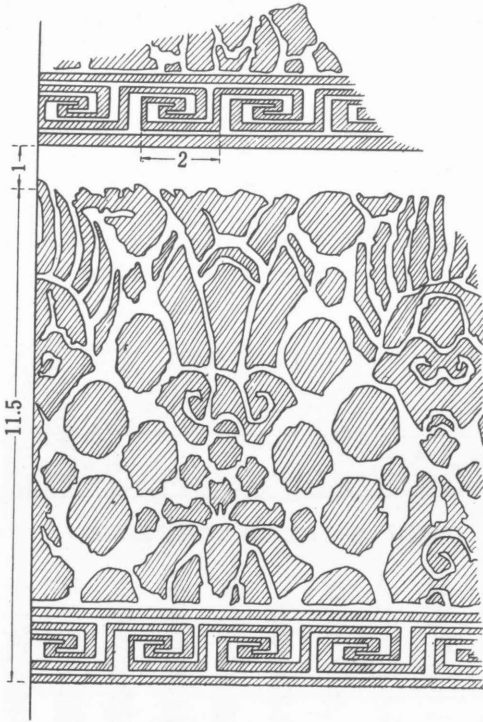
雷文が横に繋って他の文様と段になっている文様構成は名物裂系統の裂によく見受けられるがその一連と見做される。

(文様及びその大きさ)

挿図19

(地合)

地は経の五枚縹子、文は平銀糸で織りあらわされており、その銀糸は緯糸二本おきに入っている。地搦みで経糸一〇本目毎に一本が搦んでいるのは前記金欄と同様。経糸は一センチ間に一二〇本前後、緯糸は一センチ間に銀糸の入らぬ箇所は五〇本前後、銀糸の入っているところは二二本前後、銀糸は一センチ間に一一本前後入っており、

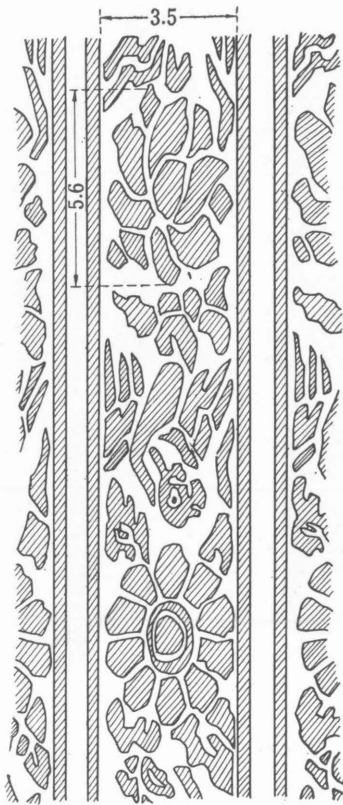


挿図19 薄青緑色雷文に花の段文様銀欄文様図

青緑色花鳥文様縦縞銀欄 (裂の種類別番号13、第二一六号図版b)

これは経糸、緯糸共に薄青緑色で撚の強いZ撚、経緯共糸かと思われるほど緯糸が細い。^{註23}
 (糸の色、撚等)

り、銀糸の幅は平均約〇・八ミリ。



挿図20 青緑色花鳥文様縦縞銀欄文様図

(文様及びその大きさ)

挿図20

(地合)

地は経の五枚縹子、文は平銀糸で織りあらわされており、その銀糸は緯糸二本おきに入る、地搦みで経糸一〇本目毎に一本が搦んでいるのは前述の金欄・銀欄と同様。経糸は一センチ間に一二〇本前後、緯糸は一センチ間に二〇本前後、銀糸は一センチ間に一〇本前後入っている。銀糸の幅は平均約一ミリで幅が広い。この銀欄は縦縞に銀が通る文様になっており、その銀の縦縞は幅一ぱいにくり返されているから前記銀欄のような銀糸の入っていない箇所というのではなく、そのため前記銀欄のような地合のつまったところがなく全面粗い感じがする。また銀糸の幅が広いので地緯の密度も粗くなる結果になり全体に地の粗い銀欄になっている。

(糸の色、撚等)

これは経糸緯糸共に青緑色で撚の強いZ撚、経緯共糸かと思うほど緯糸が細い。

この裂と同文のが岐阜県・関市の春日神社の能装束狩衣 (同文赤地銀

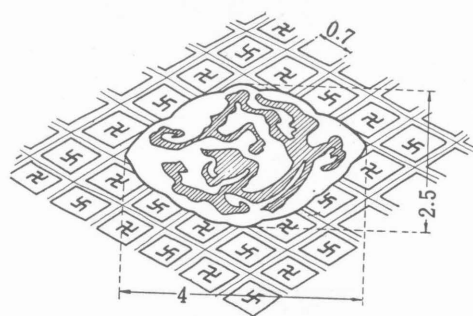
欄)、側次(同文赤地銀欄、同文薄縹色金欄、同文縹色金欄)にあり、それらには珍しく裂地の文様の中に処々、裂の織幅一ぱいに約一センチ幅に細く区切りが入り、そこに横に「袁思誠」或は「陸小惠」の文字が白糸の浮織で織り出してある(挿図21)。その文字は或場所では逆に左字になっており、また或区切りにはその文字が織り出されていない。この文字が何を意味するのか明確にはわからないが、恐らくこれらの裂の製織に当った明の機戸か織手の名称を意味するものと思われる。^{註24}これらの裂が文様の大きさも同じであり、使っている糸も何れも経緯共色、共に撚の強いZ撚、経緯共糸かと思われるほど緯糸が細く、地合は何れも上杉のとはほぼ同様^{註25}である点から推測すると、これらは一連の色違いの同文であることがわかる。また緑色の同文と思われるものが、加賀の前田家に伝わる前田利家^(天文七)^{慶長}^{註26}四¹⁵³⁶~¹⁵⁹⁹所用という脚絆にある^{註26}とのことで、そうなると上杉謙信とは同時代であり、ここにこの裂の年代の確実性が出てきて、春日のものも年代がより確実になるということになる。またこれらことから

挿図21 春日神社側次部分

この時代、この手の裂が相当多量に入り、装束の類に広く使用されたのではなからうかと思われる点注目される裂である。また春日のこれと同文の金欄、銀欄、他の金欄の類を見ると、金糸の場合はその糸の幅が○・五ミリ前後、銀糸の場合は一ミリ弱といった上杉の金欄、銀欄の金、銀糸の幅と同様な関係を有し、地糸は経緯共糸かと思われるほど双方Z撚の強くかかった細い糸(上杉の金欄三種は経糸は銀欄二種と同様なZ撚の強い細い糸であるが緯糸は普通の場合の緯糸のように太い)で、五枚縞子の組織、金・銀糸の入り方、地撚みの状態、地の密度が、何れも名物裂金・銀欄の上物にくらべると大分粗い^{註27}など共通点類似点が揃うので、或はこれらは同時代同所で出来たものであるかも知れない。それにしても、その中の同文が幾つかある花鳥文様縹金・銀欄に前述したような浮文の文字が見られるのは、今後の研究に何かの手がかりになるのではなからうか。

濃蒨黄地卍入襷に竜文様緞子(桑山緞子)(裂の種類別番号9、第二一六号図版Vb)

名物裂の桑山緞子である。茶人桑山重晴^(大永四~慶長一)^{寛永九}¹⁵⁶³・重長^(永禄六)^{寛永九}¹⁵⁶³父子のどちらかが好んだことからつけられた名称であろう。名物裂には卍の入った三重襷——多くは襷の中に卍入の菱が入った文様、菱の線も襷に平行であるため三重襷に見える。また時にはこのような三重襷ではなく一重の襷の中に卍が入っているものもある。——が地文になって上文が散らしてあるのがよくあり、この桑山緞子や芝山緞子^{註28}、藤種緞子などはその手の名物裂の中でも上質である。



挿図22 濃萌黄地卍入縷に龍文様綴子(桑山綴子)文様図

(文様及びその大きさ)

挿図22

(地合)

地は経の五枚縷子、文は緯の浮文で卍入縷は二本越しているもの四本越しているものが混っており竜文は五枚綾(左上り)になった部分が多い。経糸は一センチ間に七〇本前後、緯糸は一センチ間に三四本前後。

(糸の色、撚)

経糸は非常に濃い青味の多い萌黄色で撚はZ撚。緯糸は薄萌黄と薄縹のまざったような青味の多い薄萌黄で撚はゆるくS撚かZ撚か

不明。

(東京国立博物館蔵の名物裂帖に見られる二種類の桑山綴子)

(1) 一見上杉のこの桑山綴子と同じである。調査の結果、組織が綾(地が経の三枚綾(左上り)、文が緯の六枚綾(左上り))である点以外上杉のと悉く同じであった。

(2) 薄青緑色(経糸、緯糸共に薄青緑色)で文様が小さく(木瓜形の横径三・三センチ、縦径一・九センチ)、組織は縷子(地が経の五枚縷子、文はその裏組織)、一センチ間の経糸本数は一三〇本前後、緯糸本数は五〇本前後、糸は経緯共糸かと思われ共に細くZ撚。

白地青海波に雲文綴子(裂の種類別番号1、第二一六号図版IV a)

名物裂系統の裂の文様に雲文が多いことは今更いうまでもなからう。

この胴服に用いられている雲文綴子は第二一六号図版IVにある三種、即ちこの綴子及びこれに続いて列挙する二種である。

またこの綴子に見られるような一センチ大の二重の青海波が地文になって、それに上文が散らしてある名物裂に本能寺裂綴子、三雲屋綴子が

あり共に時代は宋元の間といわれている質も上質のものであるが、上杉のこの綴子も文様、地合、組織から見てそれら一連のものに近いと考えられる。なおこの綴子は綴子としては経糸の密度が多いので厚みのあるしつかりした生地になっている。この裂には裏打紙のないのはそうした生地であるからかも知れない。

(文様及びその大きさ)

挿図23

(地合)

地は経の五枚縷子、文はその裏組織。経糸は一センチ間に一一〇本前後、緯糸は一センチ間に三二本前後。

(糸の撚)

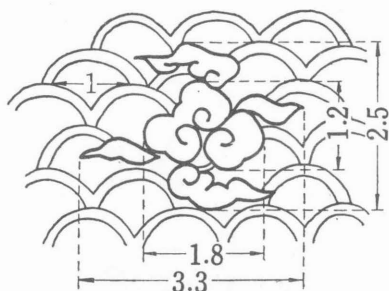
経糸緯糸共にS撚。

(類似裂)

(1) 本能寺裂綴子——東京国立博物館蔵——
文様の大きさは青海波の大きさ約一センチ、雲文の横径三・三センチ、縦径五センチ、地合は地が経の五枚縷子、文は裏組織、経糸一センチ間に一〇〇本前後、緯糸一センチ間に三五本前後、経糸は鉄色がかった濃萌黄S撚、緯糸浅葱S撚。

(2) 三雲屋綴子——東京国立博物館蔵名物裂帖——

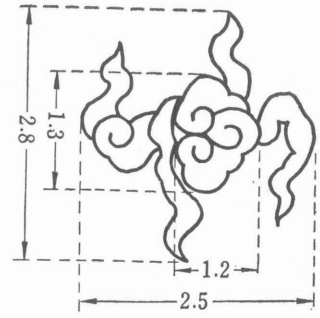
約一センチ大の二重の青海波に宝尽しの上文散らし、地合は地が経の五枚縷子、文は裏組織、経糸一センチ間に一〇〇本前後、緯糸は一センチ間に三六本前後、経糸は鉄色Z撚、緯糸は白茶で撚は不明。



挿図23 白地青海波に雲文綴子文様図

鶺鴒色雲文綴子(裂の種類別番号14、第二一六号図版IV b)

この綴子はぎめがこまかくしかも地質がしつかりしている。鶺鴒色が鮮やかである。



挿図24 弱色雲文綴子文様図

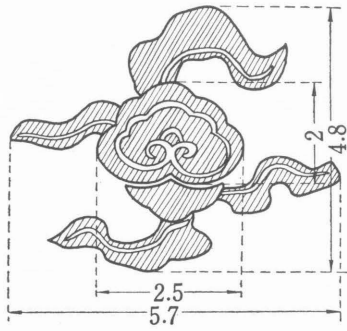
前後。

(糸の色、燃)

経糸、緯糸ほとんど同色の弱色。燃は経はS燃、緯はゆるいがS燃らしい。

黒雲文綴子 (裂の種類別番号11、第二一六号図版IVc)

この綴子は鉄媒染のため痛んでいるところがあるが、黒無地繻子より痛みが少い。現在色は褪色して茶になっている (第二一六号図版I参照) が上質のしっかりした生地である。



挿図25 黒雲文綴子文様図

(文様及びその大きさ)
挿図25、三種類の雲文綴子中これが最も大きい。
(地合)

地は経の三枚綾 (左上り)、文は緯の六枚綾 (左上り)。経糸は一センチ間に一一〇本前後

伝上杉謙信所用金銀欄綴子等縫合胴服について 下

緯糸は太く、一センチ間に二五本前後。

(糸の色、燃)

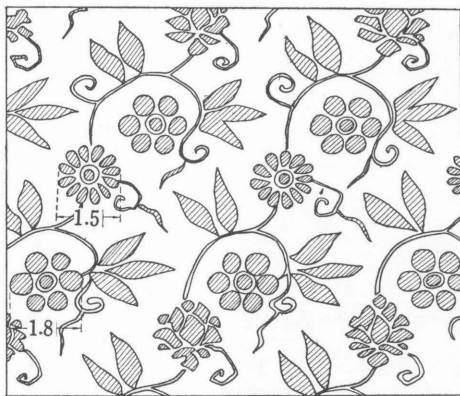
経糸、緯糸共黒が茶色に褪色、燃は経緯共にZ燃。

(類似裂)

上杉のものの中で同じく謙信所用と伝えられる「赤地雲文綴子の陣羽織(袖附)」の文様地質はこの雲文綴子によく似ている。雲文が更に大きく雲文中央の横径が五センチある。この地合は地の三枚綾 (左上り)、文は緯の六枚綾 (左上り) で経糸は一センチ間に八二本前後、緯糸は一センチ間に二五本前後、経糸、緯糸共に色は赤、燃はZ燃。

薄縹色笹蔓花文様綴子 (裂の種類別番号3、第二一六号図版Va)

これは次の萌黄地笹蔓花文様綴子と同文で、名物裂ではこの手のものを笹蔓手^{註29}といっている。本歌物の笹蔓綴子(挿図27)は名物裂中の名物として名高い。



挿図26 薄縹色笹蔓花文様綴子 (笹蔓手) 文様図

(文様及びその大きさ)
挿図26

(地合)

地は経の三枚綾 (右上り)、文は緯の六枚綾 (右上り)。経糸は一センチ間に七二本前後、緯糸は一センチ間に三二本前後。

(糸の色、燃)

経糸は濃い縹色、燃はS燃。緯糸は白に近い薄縹色、燃はS燃。

萌黄地笹蔓花文様綴子 (裂の種類別番号16)

これは前と同文で、経糸、緯糸の本数も殆ど同じである。ただこれの場合緯糸が細いので緯糸が粗く入ることになり、結果的に前記の比較地が粗い。

(文様及びその大きさ)

挿図26

(地合)

地は経の三枚綾／＼(右上り)、文は緯の六枚綾／＼(右上り)。経糸は一センチ間に七二本

前後。緯糸は一センチ間に三二本前後。

(糸の色、燃)

経糸は濃萌黄、燃はS燃。緯糸は鶉色、燃はゆるいS燃。

(本歌物)

笹蔓緞子——東京国立博物館蔵、挿図27——これは経糸萌黄、緯糸金茶で織り出されは温い色の萌黄で、地合は、組織が地は経の三枚綾／＼(右上り)、文が緯の六枚縹子^{註30}と五枚縹子の組合わせという縹子組織で、経糸は一センチ間に六八本前後、緯糸は一センチ間に三八本前後、糸の燃は経緯共Z燃。

これら二種類の笹蔓手を本歌物と比較すると、文様の類似相違は図版Va、挿図26、27に見られる通りで、六瓣小花と三枚笹の蔓は左右の向が逆ではあるが形も大きさも殆ど同じでその主文になっており、笹蔓手には本歌物にない蕨手様の小蔓が加わり、更に本歌物の六瓣小花と互の目に並んでいる俗にいういちご(隋円形の丸い実のようなもの)が菊文と蓮華文の一段おき挿入に替っており、そのためこの笹蔓手は本歌物より一模様が大きくなっている。またこの二種の注目すべき相違点に組織があり、この笹蔓手は原則通りの綾地綾文であるのに対し本歌物は調査の項で記したように異例の変則組織の綾地縹子文になっている。このため本歌物は地が綾で引きしまった感じになっているところへ縹子組織である

文様が柔かに浮いた感じに出ており(地が経の綾である場合はその文様は緯の綾組織になるのが原則で、そうなると文様の中に斜めの綾目が立って堅い感じになる)、そういう味わいが品格の高いこの裂の気品や温かみの一因になっていると思われるのである。上杉のこの笹蔓手は本歌物と較べた場合、文様の端巖さや柔かみの上で見劣るがしかし名物裂としては上物である。

挿図27 笹蔓緞子(本歌物) 東京国立博物館蔵

緑色小牡丹唐草文様緞子(裂の種類番号4)

名物裂の萌黄(緑)綾地牡丹唐草文様金欄(一重蔓中牡丹金欄)の金糸の

文を緯糸の紅色（紅が褪色して橙色になっている）であらわし、中牡丹を小牡丹に変えたもの。色も地合（その金襴の地は経の三枚綾／（右上り）、文は金糸で別掲、経糸一センチ間に七〇本前後、緯糸一センチ間に二二本前後、糸の撚は経緯共S撚）も酷似している。上物の緞子である。

（文様の大きさ）

牡丹の径約二・五センチ

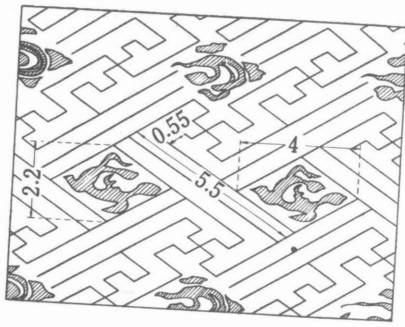
（地合）

地は経の三枚綾／（右上り）、文は緯の六枚綾／（右上り）、

後、緯糸は一センチ間に三〇本前後。経糸は一センチ間に七八本前後、糸の色、撚）

経糸は濃い緑、S撚。緯糸は紅、ただし現在は表面に出ているところは褪色し、内側になっているところは鮮かな紅色が残っている。ゆるいS撚。

黄地紗綾形に竜文様緞子（裂の種類別番号8、第二一六号図版Vc）
この黄色は橙色のかかった温い感じの色で、打込みがよく織目の揃ったしつかりした地質の上物の緞子である。竜文は菱に入ったのと入らないのところが互の目に並んでいる。



挿図28 黄地紗綾形に竜文様緞子文様図

（文様及びその大きさ）

挿図28

（地合）

地は経の三枚綾／（右上り）、文は緯の六枚綾

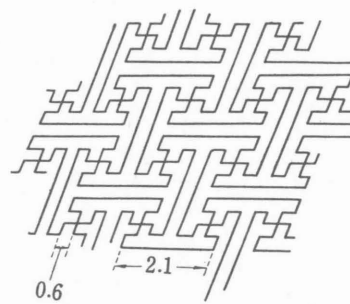
／（右上り）。経糸は一センチ間に七六本前後、緯糸は一センチ間に三二本前後。

伝上杉謙信所用金銀襴緞子等縫合胴服について 下

（糸の色、撚）

経糸は橙がかかった黄色で撚の強くかかったS撚、緯糸は金茶色でゆるいS撚。

薄縹色紗綾形文様緞子（裂の種類別番号15、第二一六号図版Vd）
この綾もしつかりした地質で、前記黄色の綾よりは多少質的に落ちるかも知れないが上物に入る。



挿図29 薄縹色紗綾形文様緞子文様図

（文様及びその大きさ）

挿図29

（地合）

地は経の三枚綾／（右上り）、文は緯の六枚綾

／（右上り）、経糸は一センチ間に七四本前後、緯糸は一センチ間に三六本前後。

（糸の色、撚）

経糸、緯糸共薄縹でS撚。

黒無地縹子（裂の種類別番号2、挿図10）
この縹子は鉄媒染のため痛みがひどい。現在は茶色に褪色している。（第二一六号図版I参照）

（地合）

挿図10

経の五枚縹子、経糸は一センチ間に約一〇〇本前後、緯糸は一センチ間に三二本前後。

（糸の色、撚）

経糸、緯糸共黒が茶に褪色している。撚は経糸はS撚らしく緯糸は不明。

白地紗綾形に蘭文様綸子(裂の種類別番号5)

上杉の服飾類の中、綸子が二種類あり、その一つである。他の一つは襟が稲妻形文様唐織の胴服(表1(7))の表裂で白地紗綾形雲文綸子である。紗綾形の大きさがこの綸子の約倍あり、地合が多少異なる。^{註32}この時代の綸子の遺品は非常に珍しく現在のところ上杉のこの二種だけである。

わが国では綸子は慶長年間に明の製法に倣って織られたといわれるから謙信のものだとするとこれらの綸子もやはり中国からの渡りものということになる。

(文様の大きさ)

紗綾形の大きさ二・二センチ前後、蘭の大きさ二・二センチ前後。

(地合)

地は経の五枚縹子、文は緯の浮織(裏組織が基準になっている)。経糸は一センチ

間に九〇本前後、緯糸は一センチ間に三四本前後、糸が細いので地質は密度が多少粗

い。

(糸の撚)

綸子は経緯共生糸で製織するから撚はない。

以上述べてきたようにここに用いられている十六種類の裂には、名物裂の中でも上物に入る桑山緞子並びに笹蔓手二種があり、文様、地質の上で名物裂に類似品のあるものが幾つかあり、その他のものも室町・桃山ごろ渡って来た明の裂の様相が濃厚である。その中でも特に緞子は粒揃いで、名物裂になっていないものでも質的に高く、名物裂と比較してその大部分が上物に匹敵し中を下るものは先ずないと思われる。金襴、銀襴は名物裂級より多少落ちるかも知れないが、岐阜県・関市の春日神社や前田利家所用の裂と同文があったり類似点の多いものがあったりし

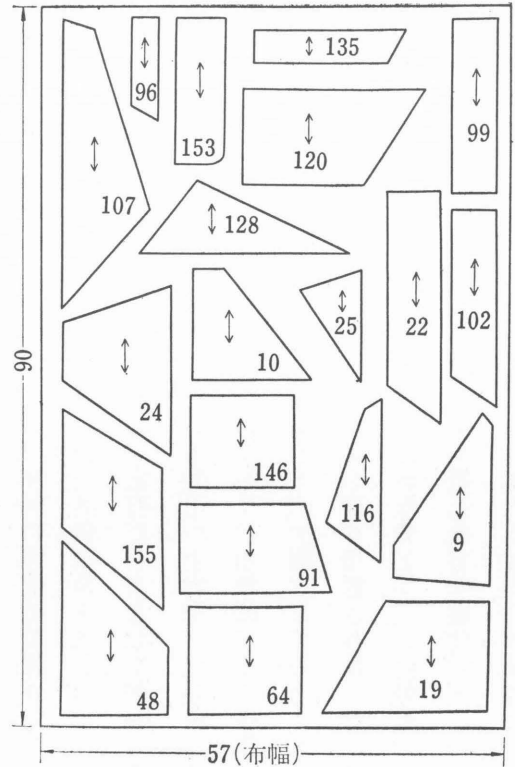
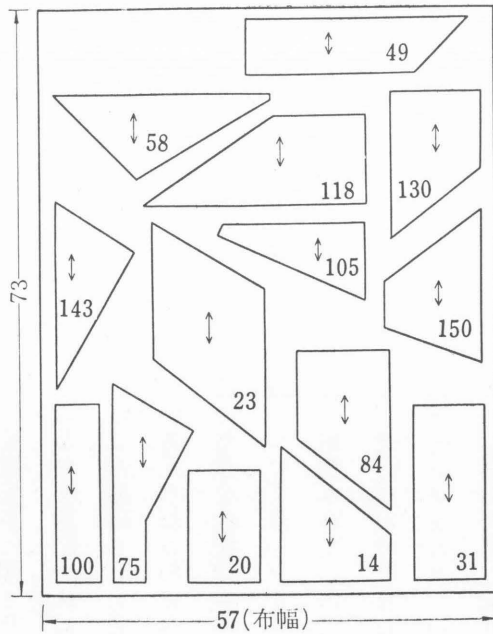
て当時の衣類、能装束、舞楽装束等に使用されていた外来裂の一端を知る貴重な資料である点注目し、縹子や綸子も或程度上物の外来裂であろうことが推測され特に綸子は資料的価値が高い。

さて、これらを質的に見ると如何であろうか。十六種類を均して当時の外来裂の中で考えてみたとき、それらは名物裂の名品群の列にはどうい及ばないにしても、下手物も相当多かったであろう当時の外来裂の中でこれだけの粒揃いは充分上物だといえるであろう。名物裂が三百種余りあるのだとしたら、これらの平均値は二百の内に入るぐらいのところはあるように思われる。外来裂の中でも勿論、有難がられ、喜ばれ、勿体ながら使われていた裂に相違ない。

(四) 十六種類の裂の用量

各裂の用量については次のような調査を行った。裂の各小片は使用に当って布目の方向に統一がなく、縦裂、横裂、斜裂種々使われている(挿図12参照)。そこで、挿図12に示すように実測図に布目の方向を印し、その実測図の各小片を切り離して各種別々に集めた。それを、当時の外来裂の布幅を平均五七センチと仮定^{註34}して、挿図30の例に示すように、その幅内に布目の方向を合わせ縫代を一センチほどみて並べた。その並べ方は模様まで合わせたわけではなく、配置も適当に行った凡その見当である。この調査を概算ですませた理由は、第一に小片を嵌めていく布幅自体が各種の裂にとつては凡その見当であるから正確な復元はその出発から不可能で、またこれは、寄せ裂という最初必ずしも一つづきの布幅一ばいの裂を用いたとは限らない条件下の仕立である関係上、正確な復元は所詮は無理であり、それにこの調査は各表裂の用量概算が出来れば

目的は充分達せられるからである。
 こうして挿図30の方法で各裂とも試みた結果は表3の中央の列に示した通りになった。次に各種裂の表面積の集計を行い、仮に五七センチ幅



挿図30 各種裂用量仮想図例 (左①白地青海波に雲文綴子 右②黒無地綴子)

の布にした場合どうなるか数字の上からだけの割出しを行って、同じ表の右列に示した。

表3 各種裂最低用量仮想一覧表(布幅五七センチ)

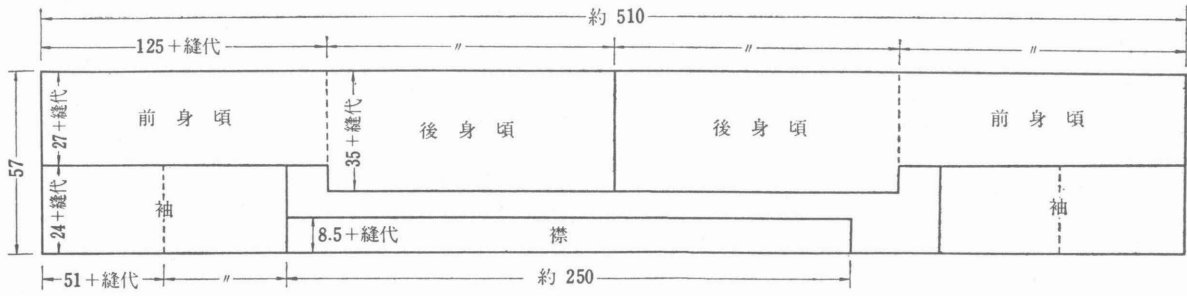
裂の種類別番号	長さ (cm)	
	挿図30の方法	各裂総表面積* を57で割る
6	42	20
12	43	23
7	41	19
10	32	13
13	51	26
9	52	24
1	73	39
14	36	17
11	55	26
3	62	39
16	14×4.5cm	一片だけ
4	55	26
8	57	29
15	27	13
2	90	54
5	46	24
計	762	

* 表4・5参照

この表で明らかのように、どの種類の裂も表面積の約二倍の用布が使われていることになる。これは、いろいろな形の小片に切りきざんだことにより、それぞれの縫代が相当な面積を占めたことを示し、切りこまざくことは即ち用布が多量に必要であることを意味するものである。

更に、この胸服を五七センチ幅の外來裂一種類で裁断すると仮定した場合、挿図31のようになり用布は五一〇センチ、曲尺で約一丈七尺必要ということになり、この場合と前述調査十六種類の裂の用量総計を比較すると、その差は約二五〇センチとなり、種々な裂を切りこまざいて接ぎ合わせたために一種類で裁つ場合の五割増の裂が使用されたということになる。

この五割増ということさえ驚かされるが、これは最低五割増ということであって、この胸服の場合は更に多量の裂が用意されていたと想像されるのである。何故なら、これだけ複雑な、これほど隙のない意匠は結果的な使用量である十六種類の最低の用布では計画できるものではない



挿図31 金銀襷緞子等縫合胸服外来裂一種類仕立裁方仮想図

いからである。少くとも各種裂共その倍ぐらひは用意されていなければこの意匠の考案はできない。充分に用意された裂の前で、配置配色に関する用布の不足等案ずることなく意匠企画に専念するので

なければこの素晴らしい意匠は生誕しなかつたと考えられるのである。この場合各種裂の用量を前記調査の倍とみると、各種裂については一メートルから二メートル近く用意されていたと思われるものが多く、その総計は数字に忠実に従って一五四センチとなり、一種類の外来裂で仕立てた場合の約三倍になる。

ここで(1)回の調査の結果から出た十六種類の裂の品質用量をまとめてみると、品質は、室町ごろ主として明から渡ってきた外来裂中の上物で、いわゆる名物裂級の裂であり、用量は、十六種類中の大半が五七センチ幅として一メートルから二メートル近く用意されたことになる。このことから考えて、この胸服は如何に端裂を利用した寄せ裂仕立とはいえ、それはもう単なる端裂や寄せ裂仕立ではな

い極めて贅沢な洒落着であったという事実が判断されるのである。

4 当時の胸服は洒落着であった

さて、以上のことからこの胸服が贅沢な洒落着であったことを知るのであるが、これを更にすすめて考えると、当時の胸服は、実用着としての胸服というよりも洒落着としての面が多かつたと思われるのである。それは、上杉の他の九領の胸服もそれぞれに贅沢で派手で粋でその意匠の凝り方は並々でなく(表1、挿図32)、また当時の遺品資料の幾つかを^{註36}考え合わせてもこのことがうなづかれるからである。

六 この胸服の美しさ

現代の抽象画をみるようなこの胸服の意匠は、事実「見事」の一語につきる感があるが、いましばらくその美しさについて考察を試みたい。

この胸服の美しさの構成要素として先ず考えられるのは「対比対照の美しさ」であろう。次に「意匠全体としては極めて派手であるのに渋さがあり」「色調は寒色の統一とみられるのに温かみがある」といった相反した二つが、それぞれ同時に備わる驚くべき美の含有性、更に「鋭く引きしまった隙のない美しさ」等であろう。ではそれらが何に由来しているか、それらの要因を順次探求したいと考える。

1 対比対照の美しさ

既に四において片身替り、袖替り、段には、その区劃された部分に、色や模様、地質等の対比対照の美しさがあることを述べたが、それらに

限らず室町・桃山の衣服には共通して多分にこの対比対照の意図が窺われる。それは、上杉の他の胴服、小袖、陣羽織の類、また当時の他の遺品資料におけるそれらの類をみると、肩裾は勿論、無地或は全面に模様のある胴服にはそれと対照的な色や模様の襟、例えば表が白地や薄浅葱

伝上杉謙信所用金銀欄緞子等縫合胴服について 下

挿図32 伝上杉謙信所用紅地雪持柳繡胴服背部部分(表1(2)参照) 米沢 上杉神社蔵

であれば赤い唐織や赤い平絹に刺繡を行った襟、全体に刺繡がある胴服には辻ヶ花染の襟をつけるといったような場合が多く、また、それら胴服、小袖、陣羽織の大部分は、表と対照的な色の裏裂、例えば表が白ならば裏は紅、紫、萌黄、鶯色、浅葱等、表が紅ならば裏は萌黄や鶯色、浅葱等、表が紺や青、薄浅葱であれば裏は紅、鶯色、黄等、表が茶の場合は裏を鶯色にする等、対照的な配色が極めて自由な組合わせで行われており、またそれら裏裂には配色だけでなく、表裂との地質上の厚みの均衡や光沢の対照も考慮されていることが、練緯や紬等の平絹、綾、緞子、綸子、金・銀欄、紙衣等には裏裂に練緯を用い、羅紗の陣羽織には裏裂に緞子を用いている例が多いことなどから推察される。

このように室町・桃山の衣服には、常に扱う裂地の対比対照の美しさが考慮されていたようであるから、この胴服の場合も当然この点に配慮があったと考えられる。

ではこの胴服の場合、どういう点にそれがあらわれているのであろうか。それは、それぞれの区劃における色、形、大きさ、地質、地質の光沢及びその配分について考えられる。そこでその分析を試みて挿図12、33、34及び表4、5、等を作成した。しかしこの分析は、美学的、色彩的見地より多角的な考察を要するものであるから現段階ではその調査の呈示にとどめる。

ただこの調査で、われわれの立場から気付いた点など、次にあげておく。

- (1) 全体の面積比に関して
色に関して(表4、第二二六号図版I参照)

表4 色別面積比較表

色 彩	種別 番号	裂の名称	前身頃			後身頃		
			面積 cm ²	%	枚数	面積 cm ²	%	枚数
白	1	白地青海波に雲文緞子	1,111.6	10.3	7	1,052.8	9.7	8
	5	白地紗綾形に蘭文様綸子	673.8	6.3	4	648.6	6.0	6
	12	白地石畳に藤巴文様金襴	783.6	7.3	5	474.0	4.4	3
		計	2,569.0	23.9	16	2,175.4	20.1	17
黄	8	黄地紗綾形に竜文様緞子	856.2	8.0	8	789.0	7.4	5
緑系 (薄)	14	鶯色雲文緞子	458.4	4.3	5	502.0	4.6	5
	4	緑色小牡丹唐草文様緞子	857.0	8.0	5	596.0	5.5	3
	16	萌黄地笹蔓花文様緞子	64.0	0.6	1			
	10	薄青緑色雷文に花の段文様銀襴	454.4	4.3	3	279.0	2.6	3
		計	1,833.8	17.2	14	1,377.0	12.7	11
緑系 (濃)	9	濃萌黄地卍入襷に竜文様緞子	602.6	5.6	4	733.2	6.8	5
	13	青緑色花鳥文様堅縞銀襴	515.0	4.8	4	962.2	8.9	6
		計	1,117.6	10.4	8	1,695.4	15.7	11
青系 (薄)	15	薄縹色紗綾形文様緞子	412.6	3.9	3	328.0	3.0	2
	3	薄縹色笹蔓花文様緞子	636.0	5.9	6	1,053.6	9.7	9
		計	1,048.6	9.8	9	1,381.6	12.7	11
青系 (濃)	7	花色雷文菱襷竜に花形文様堅縞金襴	674.8	6.4	5	384.0	3.6	4
茶	6	茶地石畳に藤巴文様金襴	391.8	3.6	4	735.0	6.8	6
黒	11	黒雲文緞子(茶色に変色)	869.4	8.1	6	606.8	5.6	4
	2	黒無地縹子()	1,351.2	12.6	8	1,669.6	15.4	12
		計	2,220.6	20.7	14	2,276.4	21.0	16
		合計	10,712.4		78	10,813.8		81

* 挿図12(調査基本図)参照。 * この面積測定に関しては註37参照。

表5 地質別面積比較表

地質	裂の種類別番号	前身頃			後身頃		
		面積 cm ²	%	枚数	面積 cm ²	%	枚数
金襴	6, 7, 12	1,850.2	17.3	14	1,593.0	14.8	13
銀襴	10, 13	969.4	9.1	7	1,241.2	11.5	9
緞子	1, 3, 4, 8, 9, 11, 14, 15, 16	5,867.8	54.7	45	5,661.4	52.3	41
縹子	2	1,351.2	12.6	8	1,669.6	15.4	12
綸子	5	673.8	6.3	4	648.6	6.0	6

* 挿図12, 表4参照。

(口) 各裂地の布目の方向について(挿図12参照)
この図に示したように、この胴服には、縦裂、横裂、斜裂が入り混って使ってある。名物裂系のこの種の裂地は、金・銀系、緯糸、織組織等で文様が織り出されているので、それらの文様は、光線の具合で文様がよく見えたり見えなかつたりする。従って、裂を縦に置いた時と横に置いた時、斜に置いた時とで

緑、青の系統の色が主調になって全体の四四・二五パーセントを占め、黄が七パーセントあまり、赤は緑色小牡丹唐草文様緞子(裂の種類別番号は4)の緯糸だけで、表面にあらわれているのは文様の牡丹唐草の部分だけであり、それも現在は茶色に褪色している。茶や黒、白はこの胴服を見たとき目立たない色だが面積は茶と黒合わせて二六パーセント、白は二二パーセントと全体の中で意外に多くの面積を占めており、こ

う目に立たない色は却って必要な大切なものではないかと思われた。地質に関して(表5参照) 緞子が主調になっていて全体の五三・五パーセントを占めている。このことは五において述べたこの胴服の中の上質の裂が過半数を占めていることを示し、この胴服の地質そのものが面積比の上からも上質であることを裏づけした。

は文様のあらわれ方が違い、また、それらの裂地の光沢もその文様と同じような結果を示す。この胴服においてそれが考慮されていたかどうかは推察も困難であり、またこのような布目で組み合わせられていることが、この対比対照の美しさに一つの役割をしているとも言いがたい。文様の明瞭な金欄・銀欄や経糸と緯糸の色違いの緞子に何か特定の用い方でもしてあるならともかく、調査の結果、十六種類の裂にそれぞれ縦裂、横裂両方の用い方があり、それも横裂は使用に当っては弱いので普通はなるべく用いない筈であるのにこの胴服では横裂の方が多く、その配分・配列にも特定の何ものをも見出せないで、この胴服におけるこの問題はいまだに不明である。

(イ) それぞれの区割に関して

形に関して(挿図12、33、34参照)

この胴服の区割で目立つのは斜めの線である。試みに十九条ある堅縞の中の切り形を形成する線を数えてみると、肩山線、袖山線、裾線を除く外して、前に斜線三八本、横線二四本、縦線九本、後に斜線四四本、横線一五本、縦線九本となり、前後共斜線が非常に多い。これはいかえれば斜めに裂を接ぎ合わせる仕事が多に多いということ、斜め裂を接ぎ合わせる面倒な作業をこのように沢山行ったことは即ちそこに何らかの目的があったと見るべきで、それはこの胴服の意匠上の問題と繋がると見て差支えなからう。

斜線の多い区割は必然的に矩形の類を少くする。この場合、正方形は裂の通し番号37、64の二つだけであり、正方形よりやや縦長の同じく1、34、47、138、146の五つ、横長矩形は同じく20、65、110の三つ、縦長

伝上杉謙信所用金銀欄緞子等縫合胴服について 下

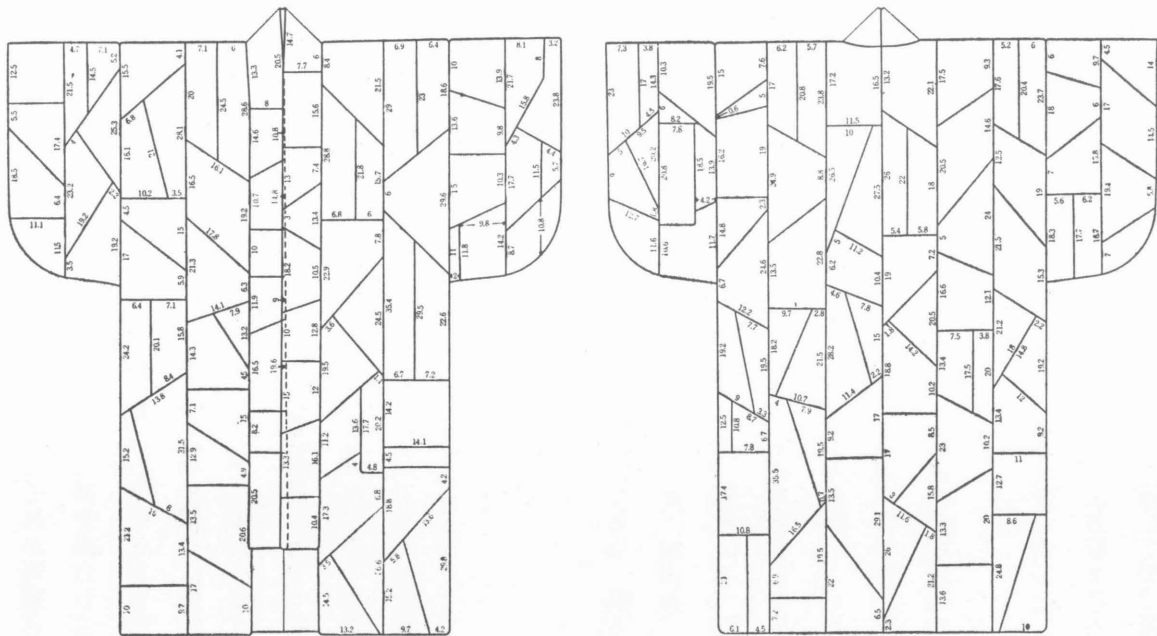
の矩形は同じく31、38、39、40、98、99、100、111の八つだけである。一五七区割の中右の一八区割だけが矩形であるというのは、この胴服の意匠と同類視される片身替りや袖替り、段が、何れもその区割がすべて矩形であるのとくらべ注目される。また前述の横長矩形三つ以外は縦長若しくは縦長に見える区割である点注目される。この斜めに截る線及び縦長の区割ということはこの胴服における意匠の独得の意図であることが考えられる。

大きさに関して(挿図12、33参照)

前述五の「この胴服における寄せ裂の特異性」で、一般に寄せ裂では大きな裂はなるべく大きなまま、そして小さな裂は極く小さなものまで集めて接ぐといったものが多いがこれはそうではないことを述べた。ここでその各小片の大きさについて測定できたので^{註37}当ててみると、最大は前身の裂の通し番号18の 247cm^2 、最小は後身の裂の通し番号85の 24cm^2 で、その差は 223cm^2 、最大は最小の十倍強にしかならないから大した差ではない。今仮に、 200cm^2 以上を大とし、 80cm^2 以下を小とすると前に大が七つ(裂の通し番号18、19、23、29、51、61、62)小が七つ(同6、17、35、37、65、72、77)、後に大が八つ(同103、104、107、118、120、131、136、142)小が十(同80、82、85、87、90、96、97、116、127、135)となり、前後共、面積の上で大きいと思われるのは小さいと思われるものの五倍から七倍程度で、それが適宜に散っていることがわかる。その間を適当な面積の種々な裂が恰も強弱の調子をとるように配分されていることを知る。

(二) 配分に関して(挿図12、33、34、表4、5参照)

三三



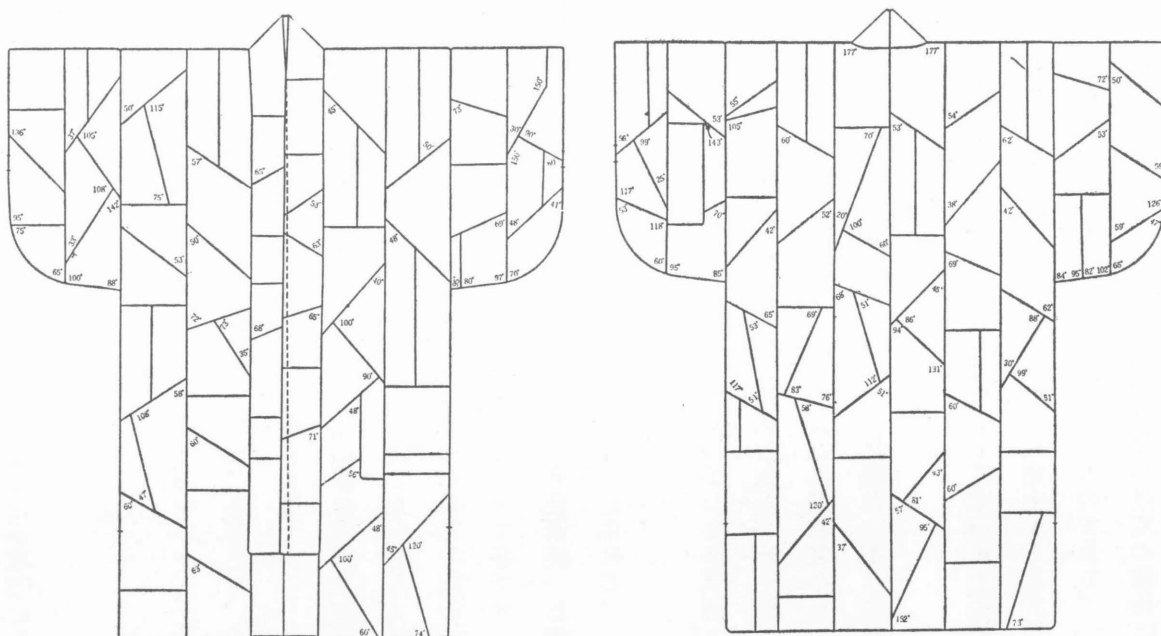
挿図33 実測図 B (各小片寸法)

- * 挿図1 (実測図A) 参照。
- * 数字はそれぞれその際にある線の長さを示す (cm)
- * 玉縁 (太線部分) の幅は 0.2~0.3cm

この調査で最も驚かされたのは、この配分に関してであった。色、形、大きさ、地質それぞれが、これだけ複雑な意匠の中で、左右相称でもないのに、そして、勿論予め綿密な計算が行われた意匠でもないのに、表や図で示されていることから明瞭であるように、前後左右、驚異的な均衡が保たれた配分で出来ているのである。全体に安定感があり、色、形、大きさ、地質、そして、その地質の光沢等が強弱緩急の快いリズムを感じさせる原因は、それぞれの区劃の対比対照が、この見事な配列配分によってなされていることをほぼ見当づけることができたのである。

2 意匠全体としては極めて派手であるのに渋さがある

この派手さ渋さの由来は、名物裂系統の裂でこの胴服が出来ているからである。例えばこの十六種類の裂の中どれかに上代の錦のような裂があったと仮定してみよう。ただ、それだけのことでこの意匠の調子が破れ、派手さも渋さも品格も失われてしまうことが想像されよう。またこの中に、後世の友禅染の小片が入ったと仮定してみよう。今更いうまでもなく、この調子は破壊される。また、上代の錦の類で統一してこの胴服の意匠構成を行っても、友禅の裂で統一しても、何れもこの切子形の堅縞の意匠は美しいものにはならない。その場合、両者とも勿論渋い感じにはならないが、そうかといって決して派手なものにもならない。このことでもわかるようにこれが美しいのは、派手やかでありながら品よく渋いのはそれが金・銀欄、緞子、縹子等の名物裂系統の裂で出来ているためである。この胴服の意匠の中で、区劃中、文様を感じる裂は金・銀系で文様を織り出した金欄、銀欄だけである。それでさえ錦のような



挿図34 実測図 C (角度)

明瞭に派手な文様ではない。緞子の類は経糸と緯糸の色の違いや組織で文様を織り出すのであるから文様といっても目立たず近くに寄ってはじめてわかるといったもので、そういう出来の文様であるために裂地に重厚味も出てくるのである。そういったことから金・銀欄以外は文様をその裂にあまり重視しない色のブロックの配列配分といった方がこの場合は適切であるように思われる。その配列配分が見事であったため、各ブロックの対比対照の美しさが存分に発揮されてこの派手な意匠が成立したのであるが、そこに重厚な渋さがあり、格調の高さが備っているのは、もともとが渋くて品格の高い名物裂系統の裂がそこに用いられているからであり、それも、この胴服の場合、この胴服の裂の中、最も品質よく格調高い緞子が全面積の過半数を占めていることに原因していると思われる。これは色紙や絵具を用いたのでは到底あらわすことができない、糸糸という特定の線を組み合わせる面を作る織独自の色の構成、その厚み、その渋さを充分に心得こなした意匠である。

3 色調は寒色の統一とみられるのに温かみがある

対比対照の美しさの(1)の項で述べたように、この胴服は緑、青の系統が主調で全体に色調は寒色である。ところが冷い感じはせず、むしろ温かみがあるのは、一つに黄という非常に目立つ色、即ちここでは黄地紗綾形に竜文様緞子(裂の種類別番号8)が面積比は少ないが、それが経糸金茶、緯糸黄という組織で構成された温かみの多い黄色であり、その配分が要を得てきていることと、また青系の色は、縹色とか花色とかの赤の入った色か、鶉色、萌黄、緑、青緑色とかの黄色の入った青であって

寒色といっても多少暖色が入っていることが原因になっていると思われる。

4 鋭く引きしまった隙のない美しさ

これは、斜線の多い直線構成の意匠であること、全体に縦長区劃の多いこと、寒色系の統一等がその主なる要因であろうと思われる。斜線が切子形の区劃に非常に多く、また急傾斜の斜線が相当にあることなどは対比対照の美しさの(1)の項で述べ図示したところであるが、この美しさの最大の効果はこの斜線の巧みな使用にあると思われる。縦縞を切って行くこの斜線が緩急の角度を調子よくとって各ブロックを縦長にも見せ鋭くも見せている。その鋭さが色調の寒色系統一と相俟って引しまった隙のない美しさを形成しているのだと考えられる。

大体以上のようなことがこの胸服の美しさの要因として考えられる。

要するにこの胸服には、名物裂系統の裂が、統一がよくバランスがよく最大限に効果的に使われて、そのように名物裂系という素材が充分こなされて巧みに使用された結果、この比類ない美しさが生まれたと考えられるのである。

以上にわたって、この胸服を主として染織史上の観点から述べてきたが、これを広く意匠の問題として工芸史上からみても見逃すことのできない価値と意義が潜んでいると思われるのである。

周知のように、桃山から江戸初期にかけての時代は、工芸意匠が変化に富み、斬新で、しかも優れ、わが工芸史上特に重要な一期を劃してい

る。今この胸服が染織及び服飾史上優れた作であり、種々貴重な意義を持つことは上述してきた通りであるが、室町末、少くも桃山初頭の制作である点において、桃山時代以降の、自由で創意に満ちた斬新な意匠の先駆的な一要素として、極めて重要な価値を持つものであることを更めて見直したい。

また、桃山時代の漆芸を代表するいわゆる高台寺蒔絵の中の巧みな意匠構成、斬新な文様、或は織部焼の幾何学的模様、抽象的模様なども一応は桃山時代の創始とされてはいるが、この胸服の意匠を見ると、そこに意匠系列上の関連性が求められ、広く桃山時代の工芸意匠、殊に斬新な類の萌芽というべき先駆的な意義を持つ点で重要な資料であると信じるのである。この関連については、詳細を当時の工芸各分野に亘って検討しなければならぬし、かつ中にはかなり複雑な様相のものや研究を要するものがあり容易には論じられないので何れかの機会にゆずりたいと思う。

以上、美しさについて種々述べたが、これは試みた調査の呈示に添えた所見であって、その分析・解明はいうまでもなく今後の研究に俟つ問題である。

七 ち む す び

こうして一応調査を終えた現段階では、この胸服は、裏打の問題、縁裂の問題になお疑問を残したものの、「うぶ」であることは間違いない事実であることが解明され、また、この寄せ裂仕立の胸服は単なる寄せ裂ではない非常に贅沢な凝った洒落着であることが明らかになった。そ

の美しさは詳細に分析解明されぬままにも、如何にもその時代特有の美しさを具えた、華やかにもわびのある、研ぎすましたような中にもあたたかみのある、能や茶にも通じた美しさであつて、これは室町・桃山期におけるわが染織工芸史上特筆さるべき傑作であることがいえよう。

(一九六一年七月)

註

13 便宜上、衣服・寝具等一括して「衣類」の言葉を用いる。

14 痛んだ個所には次々当てぎれをして刺し綴り、遂には元のきもの裂が見えなくなつても、なお次々と裂を当てて着たり、ほろ裂を幾重にもかさね刺し綴つて衣類をこしらえたり(丁度ほろ雑巾の大きいものをまとうような恰好になる)、中入綿の代りにそのようなほろ裂を重ね綴つたのを用いたりすることは、衣類が自給自足であつた時代の農民の間では当然のことであつた。これは現在でも僻地・寒村では行われており東京保谷の民族学博物館にはそのような衣類が幾つかある。また、緯糸の代りにほろ裂をさいて用いる「さき織り」とか、能登地方の「くさつゞれ」とかの部厚い織物はやはりこのほろ裂集めの一様で、ただそのほろ裂をさいて緯糸代りにして織物にする点一歩進んだ工夫が見られる。

15 信仰的乃至は俗信的意義の明らかな寄せ裂に一貫していることは、古来小裂には一枚に一人の心がこもるといった考えがあつたことである。勿論これには繊維製品が貴重であつた時代それ自身が根本的な原因としてあるが、別に未開の社会における迷信俗信がそれに殊更強く作用した感が深い。

信仰的用例——打敷や幡に寄せ裂仕立のがよくあるが、これらの殆どは信者達が寄進した裂を接ぎ合わせて作ったもので、信者の信仰心結集の意味の濃い仏教上の寄せ裂である。東博蔵の敦煌出土裂中にも幡か打敷様(断片のため何れか不明)の寄せ裂がある。

俗信的用例——(イ)厄払い 厄年に厄払いの意をこめて人々が贈つてくれた小裂を接ぎ合わせて衣類を作りそれを用いる風習があるのは、大勢の威力を俟つ意義がある。現在でも島根・鳥取地方に鱗形の模様をの身を身につけると難よけになるといふ俗信

伝上杉謙信所用金銀欄縵子等縫合胴服について 下

が残っており、厄年には鱗模様の掛蒲団を用いる風習がある。この場合鱗模様に小裂接ぎ合わせの名残り(鱗模様は三角の小裂を寄せ集め接ぎ合わせた寄せ裂模様だといふ意)があるのだと思われる。(ロ)還曆祝 人々から贈られた小裂で作つた胴着を着て祝福され健康を祈られる習慣がある。(ハ)魔除け・保温 肌着や襦袢、胴着、羽織、帯、寝具類、座蒲団等に一時代前までは小裂接ぎ合わせのものが多かったのは、小裂における魔除け性や保温性にその目的の比重が多かゝつていたからである。衣類の目的の一つ身体保護が魔除けという迷信に結びつくのは、文化の進まない時代にはよくあつた(現代でも未開人の間では魔除けの目的が存外大きい役割になつてゐる)ことで、保温の目的と共に、出来るだけ多く身につけておきたい事由からこの俗信は盛んであつた。

16 当然選ばれてもよい苦の衣服であるのに、何故選択されなかつたかといふと、この場合の動機である「裂」は、たいていの場合沢山にある小裂で、それを用いるには細かい接ぎ合わせを行わねばならぬ、この細かい接ぎ合わせの非常に多い衣服は部分的に強い力がかかつた時などその接ぎ目が弱く、従つて小袖や袴など常時膝や腰部に無理に引っぱりよう強い力がかかる衣服には不向きで、更に小裂を接ぎ合わせることには、本来ならば一幅一続きであるべき用布の中に、縦横無数に縫目を作ること、その沢山の縫目のため、帯や紐などで締めて着付ける小袖や袴には着付けた上での感じの悪さが残る。こういった理由から小袖や袴にはこの種の寄せ裂が殆んどない。この種の寄せ裂は部分的に強い無理な力がかゝらないもの、縫目が着装にさして影響しないもの、覆いかけたり羽織つたりするものに多いことは、その用例が肌着の類、胴着、羽織、寝具類、座蒲団、袋物等に多いことでも明らかであろう。

17 人の捨てたほろを拾ひ集め、刺し綴つて作った刺衲袷で、極端にまで物質生活を軽んじる修行精神に徹した僧衣。実際に人の捨てたほろを拾ひ集めて刺し綴つた糞掃衣というのは遺品はないが、挿図13に見られる法隆寺献納宝物の聖徳太子所用といわれる糞掃衣は、その精神を尊んでわざわざそれらしくこしらへた糞掃衣の原態に近い感じのもの。法隆寺のこの糞掃衣はありあわせの端裂か古い裂でも集めて作つた感じのするもので、種々の色の地の粗い麻布がアブリケのように雲形に重ねられ、これが刺子で細かく縫ひ合せてある。七条袷。

18 このハギトウジンに関しては文部省史料館の遠藤武博士にうかがつた。僻地の対馬

では現代でも裂を求めるのに一尺ずつ買い、それを接ぎ合わせて二十四替りの段に仕立てるのだそうである。裂を接ぎ合わせて作った唐人袖(筒袖)のきものという意味あたりがその名称の由来で、「接唐人」(はぎとうじん)の字でも当てるものであろう。民族学博物館には実物がある。

19 鎌倉ころから室町にかけての絵巻物に見受けられる祭礼装束や召具装束に、上衣の片身と袴の片方とをたがい違いに別裂で仕立てた、いわば西洋の道化衣裳のような思い切り派手な直垂がある(一例挿図15)。

20 わが国の染織工芸史の上では、室町から江戸初頭にかけての時代は織から染への過渡期である。既にその時代、服装の方は襲形式から小袖形式に変わってしまっている。

襲形式の時代には衣服をかさねることに目のつけられる意匠が発達するのは当然で、幾層にもかさねる衣服の色を違えて、それがかもし出す色とりどりの効果がそこには考えられていた。従ってその服装形式の時代は即ち織の時代ということになってしまっている。織文様は必要とされても染模様の必要は殆どなく、奈良時代には相当高度な水準にまで達していた模様染の技術も、この時代に絶えてしまったのである。こういう状態であったから、一枚着である上層着としての小袖につける模様が、染による模様が適しているとわかっていてもその技術がない、そこで描き絵で模様がつけられ、庶民の間に行われていた素朴な模様染の「紋り」が使われて、いわゆる辻ヶ花染となり、模様表現の手段としては自由ではあっても、極めて手間のかかる素朴な技法の刺繍が盛んに用いられて、如何にも初期的な様相を呈しながら、織文様には求められない自由な模様が現わされていた。

21 普通の寄せ裂では大きな裂はなるべく大きのまま、そして小さな裂は極く小さなものまで集めて接ぐといった気持が一貫している。

22 この名物裂という名称は江戸時代も中期ぐらいになってから言われるようになったもので、古くは「古ぎれ」というようなことを言っただけらしい。

23 大ていの場合には経糸が細く緯糸が太い。その差が大してない場合もあるが、縹子組織では一般に緯糸には平組織や綾組織の場合と同じぐらいの太さが用いられ、経糸には他の組織の場合よりずっと細いのが使われる。ところが上杉のこの胴服に用いてある銀欄では緯糸が経糸同様に細いのである。金欄三種は普通の場合同様経糸が細く緯糸が太い。

24 「袁思誠」は男子名、「陸小惠」は女子名である。中国では織手の名手が出るとその後その織手の名が機屋の屋号になったりして、その製品であることのサインに織り出されることがあるから、機戸の名称であるかも知れない(参考——熊谷宣夫氏の御意見)。

25 何れも経の五枚縹子、文は平銀糸或は平金糸で織りあらわされ、その金・銀糸は緯糸二本おきに入る。地揃みで経糸一〇本目毎に一本が揃んでいる。銀糸の幅一ミリ弱、一センチ間に九本前後、金糸の場合はその幅が約〇・五ミリ、一センチ間に一一本前後入っている。地の密度は経糸一センチ間に一二〇本前後、緯糸一センチ間に二二本前後。

26 京都国立博物館北村哲郎氏よりうかがう。

27 名物裂の金・銀欄で名品といわれているもの及び上物と思われるものに当って見た結果、それらはこの胴服や春日の金・銀欄にくらべその地質はるかに詰んでおり裂に厚みがある。経糸、緯糸共にこれらの金・銀欄の二倍から三倍の太さがあり(名品といわれている名物裂の金欄には綾組織や平組織が多いこともこの原因になっているが)、且つそれらの打ち込みがよい。そういうことから名物裂における上物の金・銀裂は一見したところも重厚で立派である。

28 東京国立博物館蔵の名物裂帖にある芝山縹子は薄鉄色(経糸薄鉄色、緯糸白茶)で卍入三重罽地に木瓜形の中にキリンの入った上文が散らしてある綾地の縹子である。

地文の卍入の菱の横径は一・一センチ、キリン入の木瓜の横径二・八センチ、縦径二・四センチ。地は経の三枚綾(右上り)、文は緯の六枚綾(右上り)、経糸一センチ間に九〇本前後、緯糸一センチ間に三四本前後、経緯共糸の燃はS燃。名物裂の研究(渋江終吉著昭和八年)の芝山縹子の項には「萌黄地又は浅葱地にて模様の色は不明なれども菱に万字を入れたるもの総体の地紋となり、上模様は木瓜形のうちに竜のあるもの、時代は明末のものと思われる。」とあり、どうもこの上杉の濃萌黄地卍入罽に竜文様縹子、即ち桑山縹子のことらしいのが出ている。

29 写し裂や和物に対し、それらの基になった裂をいう。

30 六枚縹子というのは組織の上からいって成立しない。従ってここでは五枚縹子の組織と巧みに組み合わせて綾地に浮かす縹子文を構成している。

31 薄い後練縹子絹織物、即ち経緯共糸で縹子地の文様織りに織りあげ、その後精練

し白のまま仕上げを施す絹織物をいう。綸子の地文には紗綾形に蘭や菊を散らしたのが多い。

32 地は経の五枚縞子、文は裏組織、一センチ間の経糸本数八〇本前後、緯糸本数三〇本前後。

33 佐々木信三郎著「西陣史」九二頁（工芸志料より）。

34 東京国立博物館蔵及び西脇新次郎氏蔵の名物裂に両耳があつて織幅（布幅）のわかるのが計十五種あつた。これを調査して時代的に上杉のものと大差ないと思われるものの中、錦や無地平絹、甲斐絹、広東の類を除いて推測すると、上杉の金襴、銀襴、緞子、縞子、綸子は五五センチから六〇センチぐらいの織幅ではなからうかと考えられた。そこでその中間の五七センチ幅を一律にそれらの幅と仮定して用量を割り出す上の便法とした。

35 絵羽（着物や羽織を一枚の画布と見たて、背縫いや脇縫、衽附、袖附、襟附等の縫目を容赦なく渡ってつけられた絵模様）の意匠には大ていの場合、予め雛形の紙でその模様の意匠企画をし、その後実物大の大きさの絵を大形の紙に描き、仮仕立した着物なり羽織なりをその紙の上においてその模様をすかして写しながら青花で下絵つけをする。雛形なり実物大なりの紙に出来上りを予想して絵羽模様をいろいろ考えるのが意匠企画で、江戸時代の雛形本はそういうデザイン・ブックの好例。そのような絵羽デザインが記録に残っているので最も古いのは現在のところ慶長七年の雁金屋の染物台帳（小西家文書）で、それには絵様が文章で書いてある。小西家文書にはその手の台帳がその後断続的ではあるが江戸初期まで相当量ある。その中で現在大阪市立美術館にある万治四年寛文三年の分は絵様が肉筆画で雛形本風に描きあらわしてあり、きまもののデザインが絵で記録されているもの（木版雛形本を含めて）としては最も古い。上杉のこの胸服がぶっつけで出来るものではないことは一見して見当はつくが、時代的に近接している小西家文書に絵羽のデザインが残っていることを見ても当然この胸服にはその意匠企画がなされたことが考えられる。

36 度々紹介される京都・明石家の伝秀吉所用胸服は紫と白の対比も鮮やかな肩裾構成で裾に矢襖、胴に桐紋といった思い切り大胆な辻ヶ花染であり、日光・東照宮の伝家康所用胸服は小紋染がまだ初期のその頃新しい染め方で舶来品の大幅地を定紋入りで染めさせて無双仕立にした贅沢品であり、白石・片倉家伝来の小紋胸服も同様舶来大

伝上杉謙信所用金銀襴緞子等縫合胸服について 下

幅地に小紋を染めさせたものであり、京都・豊国神社の伝秀吉所用黄色紗綾胸服は五つ紋の刺繍が凝っているなど幾つかある伝来のよい他の遺品資料の何れにもそれぞれに贅沢さ凝りようが窺われる。

37 面積は $\frac{1}{4}$ の実測図（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）を面積計（Planimeter）で計り、それに基づいて実物大の割り出しを行った。